

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」「研究」「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について行っています。

教育実習

学校現場での実習から
多くのことを学びました

子どもの笑顔の向こうの世界

人間開発学部 教授 柴田 保之

人間開発学部の2年目の教育実習が始まりました。実習校を訪問させていただくにつけ、受け入れ校の先生方には、お忙しい日々の仕事の合間をぬって親身に指導していただき、感謝の思いでいっぱいになります。おそらく、先生方も若い学生たちの中に未来の教育を見てくださっているのだらうと感じます。学校教育は、先輩の先生が後輩にわたすバトンを途切れることなくつなぐことによって発展を遂げたことを思うと、いつかそのバトンを受け取ることになる実習生は、その重みをしっかり感じ取って実習に臨んでもらいたいと思います。

実習の教室で見せる学生たちの子どもたちに向かうしなやかな姿は、ふだん大学ではなかなか見かけないもので、あるまばゆさとともに、未来への期待をたくさん抱かせてくれるものですが、一つ感じるがあります。それは、無邪気に見える子どもたちの表情の向こうにある世界のことです。家族や仲間関係、ままならない自分の個性のことなどに悩み、心に痛みを抱いていたり、仲間の痛みを共に苦しんでいるかもしれないのです。もちろん、痛みばかりでなく、秘かな喜びや願いもあることでしょう。

私はよく盲学校の少人数の授業を見学します。そこでは、教科を問わず、その子の背景にあるものが、すぐに授業の場に出できます。だから、教材研究は、常に子どもたちの生活をくぐらせていなければ、うすっぺらなものになってしまいます。

実習生のある研究授業の教材に、父親を早く亡くし、母が女手一つで小学生の姉弟を育てている物語がありました。そうした教材は、いやおうなしに一人一人の家族のあり方に届いていくはずで、仮に、そうしたことが授業の前面に出ることはなくても、常に思いを巡らせておく必要があるのではないのでしょうか。これは一例ですが、見た目以上に子どもは深い思いを抱えているのではないか、そんなことを考えさせられた教育実習の訪問でした。

教育実習視察を終えて

人間開発学部 准教授 山田 佳弘

6月末に私が担当している5人の教育実習が終了した。5人以外にも健康体育学科1期生の多くの4年生たちが母校を中心に中学校・高校に約1か月間の現場実習に出かけに行った。本人たちも緊張したのだろうが、送り出すこちらも少なからずドキドキ感があった。教育実習指導は毎年のように他学部の学生を担当していたが、今までとは違う緊張感があった。彼らの多くが期待を膨らませて実習先へ赴いて行ったが、「準備は十分に整っていたのだろうか？」という不安があったからだ。

不安を感じながら研究授業の視察で実習校を訪問し、実習生の顔を見て少し落ち着いた。教壇に立つ彼らの顔つきが現場の先生方にシゴかれたこともあったのだろう、実習前の大学生ではなく、それなりの“先生”の顔をしていたからだ。3年間の大学生活の中で一番の苦労と緊張と充実した時間を過ごしていたことが感じとれた。先生として真剣勝負の日々を送ることが彼らを刺激し成長させてくれたのであろう。実習先の先生方や生徒さんには感謝である。

しかし、ここでふと思うことがあった。『本当に十分な準備をしての実習でしたか？』ということである。実習中に成長した学生だが、もっと真剣に時間と情熱をかけて実習の準備をしていれば、実習生の授業を受ける中学生や高校生にもっと素晴らしい体験や気づきの場を提供できる授業が展開できたのではないだろうか。実習の4週間は授業を受ける生徒にとっても貴重な4週間であり、担当教員は出来る限りのいい授業を提供する義務があるはずだ。現場の先生に敵うはずはない事は百も承知だが、それでももっとしっかり準備が出来たのではないだろうか。この事は実習を終えた多くの学生が実習期間の終盤に「もっとしっかり準備をしていれば…」と実感したはずである。

少なからず後悔や反省のあった実習だったと思う。その思いを次の実習生にさせないためにも、実習を控えている下の学年の学生へこの事をしっかり伝えてほしい。何故なら実習生の授業を受講する生徒の期待を裏切ってはいけないからである。

教育実習

学校現場での実習から多くのことを学びました

子どもたちにささえられた4週間

初等教育学科 3年 嶋崎あずさ

私は5月14日から6月8日までの4週間、母校である横浜市立東中田小学校へ教育実習に行きました。この4週間は運動会という大きな学校行事があったため、1日1日が忙しく、あっという間に過ぎていきました。教師の仕事というものは、授業準備だけではなく、学年行事・学校行事、さらには横浜市の研究会まで、私の知らないことも数多くあり、実習生として、行事の仕事もたくさん任せていただき充実した4週間でした。

教育実習にまで大学では授業づくりを学んでいましたが、実習で授業を実際にやって改めて実感したことは、教師という仕事は児童という存在があって初めて成立するものということです。私は、教壇実習を行うにあたって、参観実習で見てきた児童の様子や発言をもとに授業展開や副教材の作成をしましたが、思い通りに出来た授業は一度もありませんでした。大人では考え付かないような発言も、多く出てきました。どんなに授業計画や良い指導案を作成しても、結果的に児童の声が無ければ授業は完成しないし、すべては児童があってこそだと思います。

運動会では「頑張って良かった」と心から感じる事ができました。私が担当した3年生は、Yシャツで半被を作り、ハチマキを巻いて4年生と合同でソーラン節を踊りました。実習初日から本番までの2週間の練習で、私も児童の中に入りソーラン節を踊り、指導もしました。暑さに負けてだらけてしまったり、泣きながら一緒に覚えたりした児童もいます。私はそんな児童のそばで「声をかけることしかできないんだな…」と思っていました。迎えた運動会当日、演技の準備をする児童席に向かってハチマキを上手く巻けない子や踊ることを嫌がっていた子に声をかけに行こうとしていた時、クラスの児童に言われた言葉がありました。「今日は先生は手伝わないで。先生が一生懸命踊ってたからみんな頑張れたの。だから、今日は先生に1番かっこいいソーラン節をみせるね!」と言って裸足で一生懸命踊る児童たちの心の成長は、言葉で表せないほど嬉しく感じました。

教師の頑張りは必ずしも児童に全ては届かないかもしれませんが、でも、小さいことでも何かが児童の成長につながれば、先生としてこんなに嬉しいことはないと思います。

教師の仕事の全ては、児童にあるということを感じた4週間でした。

これからにつながる実習

初等教育学科 3年 高橋 諒伍

それまでの私は、子どもに何かを教えるという経験が全くなかった。だから、子どもの前に出て話すことを考えるだけで緊張で倒れそうな気分になる。そんな私が1週目にいきなり授業をすることになった。初めてのことで、とにかく丁寧にゆっくりと授業を進めた。しかし、ゆっくりと丁寧に教えることだけが授業での大切なことではないとご指導いただいた。ゆっくりとやることで、やらなければならないところが終わらなくなってしまうのだ。45分という限られた時間の中で授業をし、最後には授業の評価をしなければならないのだ。だから、時間配分を考えて、しっかりと「発問計画」と「板書計画」が必要だ。この二つは、授業を進める上で基盤となるということ学んだ。

しかし、時間配分に気をつけようとして、失敗したこともある。それは、教師が「喋りすぎる」ということだ。どうしても、教師が何かを考えようとすると、そのことを教師が喋ってしまい、子どもたちが考えて活動する時間がなくなってしまう。授業で大切なのは、子どもたちが主役になって授業を進めることだ。教師が喋りすぎると、子どもはそれを聞くだけになってしまい、主役ではなく観客になってしまう。教師は子どもが考える素材を、提供し、手助けすることで子どもを主役にする必要がある。

また、取り上げる題材は子どもにとって身近な話題にすることが重要だと感じた。初めての授業は割り算の筆算で、教科書の問題文をそのまま出すと、子どもはつまらなそうに解いていた。先生から、「もっと身近な話題にしてみたら?」と言われたが、算数の問題を身近にするなんてどうすればいいのかわからなかった。算数に身近も何もないと思ったからだ。そこで次の算数の授業で問題提示の仕方に注目した。先生は、「A君。一緒にお菓子を買に行きたい友達を教えて。」と言って、実際に買い物に行く場面を連想させた。すると、子どもの表情はとても楽しそうになった。

授業を行うと、自分自身の情けなさに、正直泣きそうになった。しかし、何度も授業を行い自分の欠点が見えてくると、どうやって直せばいいのか。指導教員の先生はどんな風に行っているのか。自分の学ぶべき点もしっかりと見えてくる。だから、辛くても反省し、次につなげることが大切だ。4週間の実習では辛いこともあったが、それら全てが自分のためになること、何より、子どもたちに繋がっていくと考えると、楽しいと感じられるようになった。

教育インターンシップ

活動から学んでいます

第1回教育インターンシップ連絡協議会開催



7月13日(金)、第1回教育インターンシップ連絡協議会を開催しました。横浜市、川崎市の受け入れ校の先生方から、学生の活動についての状況報告をしていただきました。「特別支援を要する児童に関わってもらっているが、子どもたちの様子の変化から、教師になって欲しいと願っています。」「初めは頼りないと感じていましたが、教育インターンシップ、教育実習を経て、教職員との信頼関係もでき、学校の戦力になっていると感じています。」等。励ましの言葉をたくさんいただきました。

★活動記録から

教育インターンシップの活動を通して、指導に関わる支援や場の設定など、学ぶことができました。

<p><1年生> 身体計測 ・終わった生徒から着替えて、静かにできることをする。 (ドリル・折紙・お絵描き等)</p>	<p>★「すしみの徹底」</p> <p>①わて ②ずかに ③とりどきること</p> <p>・ひとりひとりに③④⑤を呼びかけても、なかなか静かに座ってられない。担任の先生がひとこと「今にする時間？」「しゃべっているのは誰？」と言うと、ひとと静かになった。全体に呼びかけてから、できていない子を後から見るといい。信頼されるような人間性。また叱る時とほめる時のメリハリの大切さを知った。叱る時はきちんと理由を教え、理解してもらえそうな指導をする。</p>
<p><2年生> さつき 個人授業 算数 たしめの算の方法</p>	<p>10-3=7 (ほん?) □□□ □□□□□□ 10個の70-7から3個の70-7をとると余りは7個?</p> <p>③ ③ + ④ = ⑩</p> <p>10のうち3を③とすると残り7。ほん? ③と⑦とたるとあまった7をたすと、もとの10になる。</p> <p>④⑤ 10-3=7 10=3+7</p> <p>⑦⑧ 基礎の式のページ⑧の次のページに⑧+ きちんと基礎のことを覚えたか、基礎のページが見えないか、たのページで応用が行えるよう仕組む。</p>

初等教育学科2年 小泉智子さんの活動記録です。

未来塾

「人間開発は人づくり」をモットーに!

未来塾は、学生が「将来なりたい自分」、「叶えたい夢」を実現することのサポートを目的に、スタートした講座です。自己課題に応じて講座を選び、積極的に受講してくれることを願っています。今年度も以下の講座が開講されました。

講座名	担当	開講場所・開講期間
「臨海学校・遠泳プログラムの見学及び小遠泳体験」講座	木村 一彦 教授 原 英喜 教授	千葉県南房総市 8月に1泊2日
「柔道基礎力養成(昇段に向けての通年講座)」講座	上口 孝文 教授	体育館柔道場 4月～学年末
「体育・スポーツ・健康関係雑誌交読会」講座	一 正孝 教授	3号館一研究室 6月～2月
「楽しい保育教材研究」講座	石川清明 准教授	3号館石川研究室 通年開講
ピアノ講座 A 「ピアノ講座」(ピアノ学習に意欲のある学生対象) B 「幼稚園実習対策ピアノ講座」 (4年次幼稚園実習受講者対象) C 「教員採用試験対策ピアノ講座」 (次年度教採試験受験者対象)	高山真琴 准教授	1号館ピアノレッスン室他 各目的終了期まで
「杖道・居合道実践」講座	阿部弘生 助手	体育館剣道場 通年開講
「泳げるようになろう」講座	原 英喜 教授	横浜国際プール 6～10月

思ひ草

第8号

平成24(2012)年7月31日 発行

真の『個性』追求～太郎が太郎になることを応援～

人間開発学部長 しんとみ やすひさ 新富 康央



個性を多様性(ユニークさや他との違い)ととらえる論調が、世間では未だに一般的です。「あの人、個性的ね」と言う時、その人が他の人よりも変わっているという意味で使われます。個性を他の人との違い(多様性)ととらえるのは間違いであり、個性とは、連帯の中で輝く自分の「よさ」に向かって、精一杯頑張り、輝こうとする活力です。すなわち、個性は多様性ではなく、主体性の問題なのです。しかし、間違った個性観が、教育界にも大きく影を落としています。「個性の時代ですから、ダメと禁止もできませんし」。個性を他との違い(多様性)と考え、一般常識から見て禁止すべきことも許してやり、自由にさせてやらなければ、とってしまうのです。ゆとり教育問題以上に、これは教育力の低下現象を起こしました。

手を子どもの前に差し出すと「指導」してしまうので、教師は手を後ろに組み、「支援」に徹するという方針を出している学校。「遅刻も個性なのに未だ遅刻点検」。こうした記事が、大手新聞の教育欄に掲載されたこともありました。心のケア(癒し)が必要とされるようになった先生にも教育研修所で紹介されました。「子どもと向き合い、体当たりで教育をしてきまし

たが、今は個性の時代。私の教師生活は結局、子どもたちの個性をつぶすことだった」。先生の頬には一筋の涙。実は、真の個性観から言えば、この先生は、いい加減な個性観の犠牲者でもあるのです。怒りさえ感じました。

文科省が提案した「個性尊重(重視)」の教育政策とは、主体性としての個性を発揮した結果生まれる「違い」を大いに認めてやろうという教育方針です。4番でエース的な「品行方正・学業優秀」ばかりが個性ではないとする教育姿勢です。今日の子どもたちに、自分の「よさ」に向かって輝こうとする「自尊心」が希薄となったことを心配したのです。

間違った個性観は、人権問題でもあります。「その子なりに」という言葉がもっともらしく使われますが、それを多様性としての個性ととらえると、「あなた知恵を出す人、わたし汗をかく人」式の差別的人間観に陥ります。「太郎が(あるべき)太郎になろうとする」、一生懸命な挑戦。そしてまた、そんな太郎に心から声援を送るクラスの仲間たち。それこそが、教師を目指す本学部学生に求めたい個性づくりなのです。

教育実習で培う「教師力」を考える

教育実践総合センター長 たぬま しげき 田沼 茂紀



GW明けと共に、教育実習がスタートしました。昨年度の初等教育学科3年次生に続いて、健康体育学科4年次生の教育実習も今年度は開始されました。学部の完成年度を迎え、まさにフル稼働です。

さて、本学部では、全教員で教職課程履修学生の教育実習実地訪問指導を担当します。正直なところ、講義や大学業務の合間をかいくぐっての日程調整は至難の業でもあります。しかし、本学部は教員養成系学部として最後まで責任ある指導をするという立場から、どんなに遠方であっても必ず一度は訪問指導に赴きます。

実習校にお邪魔すると、そこでは判を押したように、真剣な眼差しで子どもたちと向き合い、授業と格闘している学生の姿があります。教職への思い溢れる初々しいその姿を前にすると、不覚にも遠い昔の自分と重なり合い、胸の奥が締め付けられ、目頭がジーンと熱くなってきます。この不思議な感情、教員養

成系学部教員にとって実地訪問指導はルーティンワークの筈ですが、何度体験しても「日々は新鮮」というのが正直な気持ちです。

ところで、学生たちは教壇に立ちながら、どんなことを学んでくるのでしょうか。実習を終えた学生は例外なく、目を輝かせて変容した自分を口にします。教育実習で学生たちは何を学んでくるのでしょうか。私は、それは「教育の心」だと確信しています。

もっと分かり易く言うなら、近代教育学の祖と呼ばれるJ.H.ヘルバルトが唱えた「教育学的心術」と「教育的タクト」であると考えています。教育学的心術とは平易に述べれば、教育学的なものの見方、感じ方、考え方です。そして、教育的タクトとは、教師の子どもに対する応答力です。大学を離れ、学校現場で学ぶ意味こそ、そこにあるのだと常々考えているような次第です。